

戸川幸夫動物文学全集

1

戸川幸夫動物文学全集
1

講談社



戸川幸夫動物文学全集1 孤独の吠え声ほか

昭和五十一年五月十八日 第一刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―二二一 郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五―一二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©戸川幸夫 一九七六年 Printed in Japan

目次

孤独の吠え声	5	高安犬物語	138	苺別れ	168
失われた環	196	爪王	221	御用邸狐	240
仏法僧	262	わが友ドルファー	283		
將軍の秘密	301	原猿への幻想	321		
解説・尾崎秀樹	336				

孤独の吠え声

火の楯

気味の悪い鼠色の雲が山腹にひきちぎられて、いくつも掠めてゆく。

雨雲の向うにも雨雲があつて峰々はすっぱりとその巨大な懷の中に包みこまれていた。

うすい色の雲があれば、濃い色の雲もあるように、脚の速い雲もあれば、遅いのもあった。

一つの雲のあとから次の雲が続き、切れ目はあつても絶えることはなかった。雲は東から西へ、尾根に沿うようにして走り、谷あいや岩嶺にまぎれ込んだ雲が、とまどつた様子でそこで渦を巻いた。そうした時、その場所では山巔からだと叩きつけてくる山風と谷底から吹き返す谷風とが入りまじつて、絶壁にしがみついている落葉樹——板屋楓、白樺、沢胡桃、檜、山毛櫸、黄楊、朴、岳樺など——を残酷に揺すぶり、その枝から挽ぎとった枯葉を岩燕の様に谷間一面に舞わせた。

光は刻々とうすれていって、黒々とした不吉さが、濃厚

になってゆく雨雲に充滿してきていた。

谷底をのぞきこむようにして生い繁っている原生林は海鳴りの騒々しい音をたてていたし、すでに枯死の顔色を見せている野草たちは波のように激しくざわめいた。それにもかかわらず、この荒涼とした大地がもつ悲哀と、天候の意味する酷薄さが、生命の存在を全く否定する世の終熄のような茫漠とした静寂さを感じさせていた。

果して雲と風に乗って雨がきた。雲の流れは、前ほど速くなくなった代りに、前後のすき間を埋めつくした。雨は山地の温度を急激に下げ、それ自体が凍りはじめていた。

空には一羽の鷹の姿もなく、林には一匹の野鼠の姿もなかった。生命は姿を消し、荒々しい死の乱舞だけがあつた。

黒いマントの死神が、生けるものの片われとして原生林を風の管でうちすえるたびに樹々はひゅうひゅうと泣き喚いた。

雨はだんだんと激しく、横なぐりというよりも、下から煽りあげてきた。

やがて葉をむしりとられた白樺の林すらが暗くなつてきて、雨の一部は雪に変わった。大地はそのために一層きびしく冷却していった。

だが生命は在った。よろぼうようにして中津川の溪谷を登ってきた三人づれの男があつた。一人はひどく傷つき、二人は疲れきっていた。傷ついた男は疲れてはいるがさして血も流していない男の肩にすがり激しく喘いでいた。顔

の血の気もほとんどなく、消えようとする生命の灯をやつと持ちこたえているといった苦しい表情であつた。肩をかした男は立木を切つて作つた杖で迂りがちな溪流ぞいの岩の一つ一つを確かめるように突いて歩いた。

その男よりは瘦せた、しかし長身な男は一間ほど先を道を探りながら歩いた。

嵐に应えるかのように溪流は奔騰して飛沫を散らせ、三人の男たちはびしよりと濡れていた。

だが三人は進むことしか知らないように、挑戦的に登つた。自棄くそとも見えた。

三人ともこちらの農民が着るような蓑をまとい笠で顔を隠していたが蓑の下からは鎧がはみ出ていた。手甲と脚絆、草鞋、そして血に強張つた袴——それが共通した特徴だった。

風と氷雨と飛沫で手足は凍え、感覚も動作も失いがちだった。

見上げる空はこの谷底よりはまだ明るいが、黒々と雪片が渦を巻いている。

よろめいて、傷ついた男が石に膝を落した。

「おいッ」

肩を貸していた武士が声をかけた。膝をついた武士は力なく首を横に振つた。

先を歩いていた武士はその声で立ちどまり、無言で戻つてきた。誰もがこの困難を生き抜くために、呼吸と歩行以

外に余計な力を消耗させまいと決心しているかのように喋りたがらなかつた。

駄目だな、どうしよう——というように背の低い武士が、眼で云つた。荒々しい野性に屈伏させられようとして

いる仲間が、二人の間にうずくまっている。二発の小さな鉛の玉が、その武士の肉体に喰いこんで化膿させ、その苦痛が自然の暴威に力添えしているのだ。時間の問題であることを二人は考えまいとしても知らされた。

「どこか、土穴でもないか」

背の低い方が、かすれ声をやつと出した。

「狩小屋でもと搜したのだが……」

長身の方が答えた。

「間もなく暮れる。木の洞でもよい」

「む」

長身は絶壁を見上げた。あそこまで担ぎ上げるのは大変だ。不可能といえる。

溪流に木の洞などある筈もない。だが何とかしなければならぬ。何かをしていないと不安だった。

「小田、気を落すなよ」

薄らいでゆく自信に反抗するように力を籠めて云うと長身の武士は歩きだした。そのとき、死んだように岩にもたれていた小田と呼ばれた武士が顔をあげた。

「俺に……俺に構うなッ」

「なに？」

「馬鹿を云うな」

「いや、馬鹿ではない」

小田はのしかかってくる重い圧力を全身の力ではね返そうとするように喘ぎながら、

「この傷では仙台はおろか……吾妻越えすら覚束ない。俺に構わず行ってくれ」

「何を云うのだ」

背の低い方が、小田の肩を抱いた。

「上野、宇都宮、日光、会津と三人一緒に戦ってきて、今さらお前だけ捨てて行けるか」

「ち、違う」

負傷者は頑なに首を振った。

「会津は随^もちて薩^{さつ}長^{ちやう}との戦いは終つては居らん。味方は一兵でも欲しいときだ。

俺のような足手まといに構わず同志の者の後を追ってくれ。な、金子、頼む。志田、俺の代りに働いてくれ。遅れではならぬのだ」

「とにかく……」

背の高い志田という武士が立ったままで云った。

「この尾根を越えれば米沢領。傷によく利く温泉が湧いていると聞いた。冬の間は無人の宿となるそうだが、却って幸いだ。身を匿^{かく}すのにもってこいじゃ。

そこへ行つて傷の手当をするのだ。そこまで行つて先のことは思案しよう」

「それがいい。さし当って今夜だけの辛抱。洞でも見つけて火を起すから待っていてくれよ」

金子も口を揃えた。

この天候、この地形ではいくら執拗^{しつとつ}な薩長の敗残兵狩りでも、ここまでは及ぶまい、と二人は考える。二人は幽霊のように空ろになっている友人の体を崖下に移し岩にもたれかけさせておいて、更に溪流に沿って登った。

二人はふたたび物を云わなくなっていた。会津の落城を見越して脱走して仙台へと走った同志の誰彼のことを考えていた。会津藩士たちは、主君と行動を共にしたのである。だが、自分らは同志でこそあれ、家来ではないのだ。あくまで薩長と戦うために次の拠^より処^{どころ}を求めるのだ。

みんな無事に脱出できたであろうか。町人や旅の者に化けて薩長軍の眼をごまかそうとした多くが、哨戒線^{しょうかいせん}にひっかかって斬られたと云う噂だった。

薩長の兵士たちは鬼だった。たとえ刃向かわなくとも彼らの意志に抗^{あが}う者は斬られた。武士たちだけでなく、町人でも百姓でも、老人や婦女子でも差別はなかった。裸踊りを拒んだかどで数人の娘が斬られた、通過する官兵を憎しみの眼で見たといつては老婆が殺された。戦場近くをうろろして怪しい奴というだけで取調べもなく首を刎^はねられた——こんな話を毎日のように聞いてきた。だから三人は中ノ七里、檜原、早稲沢と裏磐梯に迂回して山道に忍び、大早稲沢から中津川溪谷へとようやくの思いで逃れてきた

のだ。今さら死んでたまるか——。

小一時間ほど歩いて志田が足を止めた。左手のやや高くなった処、洞でも土穴でもないが崖の中ほどの岩が軒のようになり張り出し、その下に裂けた隙間があった。一人は楽に横になれる。そして二、三人はその前で雪にもやられずに過せそうだ。上って調べてみると裂け間には乾いた土が溜っていた。寒気を防ぐわけにはいかないが、他にこれ以上の処は見つからないに違いない。

「ここがいいな」

調べた金子が志田に声をかけた。

「うむ」

「よし、小田を連れて来よう」

「こんどは俺が背負ってこよう、木を伐^きって火でも作っていてくれぬか。火起しは俺は苦手だ」

山の雨はどうやら全く雪に変わっていた。今年は雪が早い。

「そうしよう」

金子は暗くなりかけた崖上を見上げた。白樺の林がほの白く浮いて見える。白樺の皮は油があり、よく燃える。

一方、志田は溪流に足をとられぬ用心をしながら直感的に跳ねて岩から岩へと急いだ。

そのとき、かすかな一連のすき透るような叫びが突然に崖の上の方で起り、山風に乘って彼の体を追い越していった。

その叫びは渦まき風のためにきれぎれになって響いたが、たしかに長く続く美しい歌声で、最初は低く、やがて急速に高まって絶頂に達したときに哀愁のうるみで震え、そして徐々に消えて、終りがどこともわからぬうちに絶える——そんな叫びだった。しかもその悲哀のトレモロの中には残酷な血と肉への渴望^{かつぼう}が滲^{にじ}んでいた。

志田はぎょっとしたように立ちどまった。そして一瞬間き耳を立てた。

叫びはもう絶えていた。ざあざあという原生林の喚きと、溪流のぐうぐうという響きの中に在っては、たったいま耳にしたことも嘘だと思えなかった。

この雑音の中で聞える筈のない音声なのだ。志田は首をふって、びよいと岩から降りた。そこは小石の続く河原が少し連なり、溪流から遠ざかって歩けた。

少し歩いてから彼は再びあの声を耳にした。針のように鋭く、鼓膜に捻^{ひね}じこんでくる叫びだ。

「畜生ッ——」

こんどは聞き違いではない。風の回転で遠くもなり、近くもなっているが確かに血に餓えた灰色の肉食獣^{肉食獣}の胸腔^{きょうくう}から噴き出される叫びであることは間違いない。

志田はこれまでの戦いで激戦のあと鴉^{からす}が集まってくることを知っていた。この食欲な鳥どもは戦いがあれば肉にありつけることをちゃんと心得ていた。

まだ死にきらぬ重傷者の傍の木にとまって嬉しそうな流

し目を送り、憎たらしいガアガア笑いを交しながら待つのだ。

鴉たちは靈感に近い本能で、どの人間が死に、どの人間が助かるかをちゃんと見分けていた。彼らは黒い喪服を着た死神だった。彼らが、枕辺に居並ぶとその人間は決まって死んだ。

それと同じように狼たちも、人間の死期を知っているのかも知れない。残虐心と飢餓とを満たしたいという熱望から、傷ついた人間の苦痛からの解放を早めようとするのかも知れない。

三度目の遠吠えは、前の二回よりもはっきりと、そして近く、下流の方で起った。叫びに続いて別の叫びがそれに応え、さらに他の叫びが起った。

「畜生ッ」

志田は走り出した。

走りながら、彼は友人の名を呼んだ。野生の獣たちの襲撃する時の唸り声を聞いたような気がしたからだ。

小田が坐らせられていたあたりには一足早い夕闇が迫っていた。

志田はすかして見た。小田はもたれていた岩から一間ほど下にずり落ちて、別の小さな岩を左腕で押え、足を投げ出したまま抜刀していた。

右手に持った白刃が夕闇の中で白く見えた。志田は杖を抛ると、刀を抜いた。

すうっと沁るように黒い影が小田のすぐ傍から走った。青く光る眼だった。

「小田ッ、大丈夫か？」

「む、大事ない」

よかった——志田は小田の傍に走り寄った。糞はずっと速くに投げられていた。

「六匹……いやもっと居たかも知れぬ」

小田は喘ぎながら云った。鉄砲傷の化膿が彼の肉体をひどく熱っぽいものにしていて、努力してものを云っていることがわかった。

翌日は見事に晴れた。

谷底から見上げる絶壁の上の原生林も描かれた林のように、そよとも動かず青空の中に立ち並んでいた。

昨夜の雪が樹々の枝の先までを凍りつかせて、ビイドロ製の森のように、朝日をうけて美しく輝いている。

溪谷の底へはまだ陽の光は届かず、昨夜の雪が残っていた。その上には梅花模様の足跡がいくつも残されていた。

そうした証拠がなければ、昨日の嵐も狼たちもすべてが疲労と発熱のための悪夢だと云い切れたかも知れない。

「見るがいい。あいつら一晩あそこで俺たちを見張っていたらしい」

と金子が下手の岩棚を指差して云った。

そこは三人が一夜を明かした岩棚の続きと云えないこ

とはない。中ほどで途絶えてはいたが同じ断層が走っていた。雪はそこにも深く積っていたが、一カ所、黒く雪のないところがあった。寝た跡だ。確かにそこは三人の動作をじっと監視しているにはもってこいの場所といえた。

「火を焚いていたからよかったが……この足跡から察すれば小田の云うように五頭や六頭ではない」

「こうなると鉄砲を捨ててくるではなかった」

と金子が云った。

「いやそうではない。やはり捨ててきてよかった。狼ごときに鉄砲を射ちかけて、その音でも聞かれてみい。

敵にわざわざ居所を知らせるようなものだ」

「いかにもそうだ。狼は刀で……いや刀では穢れるな。そうだ木刀を作って、それで撲り殺せばよいわけだ」

二人は声を併せて笑った。だがその笑いには力がなかった。

天候は回復したが、小田の健康は悪化していた。水雨にながい間うたれて無理な登山をしたために、化膿箇所はふくれ上って破れ、灼けるように額が熱い。

「このままここに居ることはできぬ。温泉宿へ運んで医者を迎えるのだ」

「大丈夫か？」

「やむを得ぬ」

と志田は云った。金子は、無理すると死ぬぞ——と云おうとして口を開きかけたが、思いかえして、うむ、そうよ

なア、と相手というよりも自分に云い聞かせるように頷いた。

「俺が背負うから、荷を持ってくれ」

と志田は云った。荷物といっても少量の干飯と小田の小であった。

「蓑、笠は捨ててゆけ」

と志田は云ったが、金子は、

「いや、俺にも考えがある」

と一まとめにして肩にした。

渓谷は歩き難いが、身を匿して行くという目的には適した。

「戸倉川の上流にまで手が回っていたのには愕いたな」

先に立って金子は喋った。何か喋っていなければ不安なのだ。最初三人は長井川に沿って檜原峠へ出るつもりであったが、米沢と会津の重要な連絡路を敵が見逃している筈がない。檜原峠を押えた官軍の一隊が脱走兵を追って戸倉川の上の方から下ってきた。一瞬はやく三人は見た。

三人は右手の大早稲沢山へ、なるべく人の歩いた跡のない山林へと潜り込んだ。人に会わぬ様にとの願いから林の中へ中へと進んだ故もあったが、吾妻連峰を包みこんだ霧と雨雲のためにすっかり方角を失い、中津川に入ったのだ。

熱でぐったりとなっている小田の体を二人は交替で背負った。一人が負えば他の一人が曳き、また押した。先に立

って雑木を切り払いもした。

溪谷が次第に狭隘きせいのになったところで崩壊場所はなれがあり三人はそこから上に登った。

「心配ないか」

小田を背負った金子が問うと、志田は坂の途中で手を振った。

「差支えない。猿が群れている。敵兵がいない証拠だ」

雪はあとかたなく消えていた。まだ根雪には間があるらしい。

尾根に立つと高原状の台地が広々とひらけていた。左手の峰が一番高く、正面は馬の背型にくぼみ、右手がまた高くなっていた。

樺つが、楓松などを主とする針葉樹が頂上近くまで見事な林相をみせ、それに続いて偃松帯はなづかが拡がっていた。

太陽はかなり西に傾いていた。

「あれが西吾妻か。中大巔なかだいせんの頂上まで行つて適当な場所を捜そう……」

と志田は云った。

二人とも口には出さないが昨夜の不安を同じように想い出していた。

濡れた木は燃えがわるく、ちよつと手を抜くと消えようとした。二人は燃えのよい白樺の皮を剝いでは火の中に投げた。

燃え易いということは永もちしないということと同様だ

った。火はばあつと燃え上る代りにすぐ消えた。すると焚火の向うの暗黒の壁の中で、火の粉を散らせたように一対ずつの光が無気味に光るのだ。

火が燃え上ると光の粒は遠のいて消え、火が消えかかると光の粒は近よつて数を増した。それは永遠の真理をものがたる不滅の相互関係のように思えた。

あるときはうっかり二人ともとろとろと寝入った。ふつと志田が気づいたとき星の壁は意外に近くまで迫っていた。

「おのれッ」

志田は刀を握むと横に難いだ。手応えはなかったが、獣たちの慌てて飛び退く騒ぎと唸りをはつきりと耳にした。

昨夜はそれでも背後が岩壁で、うしろから襲われる心配はなかった。怪我人を岩棚に押しこめて、二人でその前に坐つていれば安心だった。だが、今夜はそうはいかない。「場所を……、明るいうちに場所を作つて木を集めねばなるまい」

志田はもう一度、口に出した。

「捜してくれるか、先に登つて……」

金子は云った。

小田は一層ぐつたりとして、死んだも同様なほどに弱りきっていた。

志田は頷いて足を急がせた。そこから正面の鞍部までは険しい道ではなく、ゆっくり歩けば独りで背負つてゆけた。

「これからどうするというのだ」

独りになると金子はつい愚痴めいた考えが浮かぶ。絶望的な不安が四方から波のように押しよせてくる。

「この虫の息になった小田を負ぶって仙台までゆくわけにはいかん」

それかといつて瀕死の友をこの山中にどうして置き去りにできよう。

「米沢藩は会津の同盟藩だった」

会津が陥ちたように米沢にも今ごろは錦布れのだんぶくろが充滿しているに違いない。うかと城下へ降りてゆくことは危険だった。

だが力によって屈伏された米沢人の心の底には薩長を憎む感情が消えている筈がない。どこかにわれわれを匿まってくれる家がある。そして手当てしてくれる医者もある。そこに預けてゆこう。

ようやく中大嶺にたどりつくと、志田が待っていた。

「見たか？」

志田は怒ったような云い方をした。

「何が……」

「ここをだ。この大地をだ……」

金子は四辺を見回した。雁の腹摺りと俗に云われる鞍部は風の通い路になっていて大きな樹はなく、横に枝を伸ばした偃松と蘚苔類が生えている。そこは太陽熱に溶かされるよりも風に冷却される方が早いのか、昨日の雪ががりが

りに凍りついていた。

金子の眼にはたつた今あるいてきた自分の足跡と志田の草鞋の跡しか見えなかった。

「足跡は俺とお前のだ。ほかに誰かきた者があるというのか」

と金子は訝しげに訊ねた。

「登ってくる途中では野兎の糞をいくつか見た。それなのに、この雪の上には足跡もないのはどうしたことだ。野兎は天気のよい日には雪の上に出て騒ぐ筈だ」

と志田は云った。ふう、そんなもんかな、と金子は首をひねった。

「何かある。何かあったのだ。兎どもはそれを知っているのだ」

「また天候が変るのかな」

「そうかも知れぬ。別のこともかも知れぬ。しかし、これだけは云えるぞ。今夜もあいつらは襲ってくるぞ」

「来るかな？」

「来る」

志田は自信のある口ぶりで云うと、

「とにかくその準備をして置くことじゃ」

「それはそうだが……」

金子は四辺を見回して、

「小田をどこに置こう」

「洞はないのだ。偃松の上に寝かせよう」

雪がないだけでも見つけないものだ。二人は小刀を抜いて偃松の枝を切り幾つも重ね、その上に蓑を敷くと小田を寝かせ、再び蓑と偃松の枝を乗せた。

「すまぬ」

うわごとのように小田が云った。或いはうわごとであつたかも知れない。

太陽は静かに沈んでゆき、雪の面をばら色に染めた。そのころになってようやく三人の傍につき重ねた偃松のしめり気のある枝がぶすぶすといふり、小さな焰を這わせはじめた。この辺りには白樺はなかった。

白樺林のあるところまで無理しても行くべきだった、と二人が考へついた頃には雪面のばら色も急速にあせて、紫から濃紺、そして黒へと夜の幕が一枚一枚重ねられていった。

火はなかなか思うように燃え上らなかった。食糧も殆ど欠乏していて人間たちが狼のように飢餓に悩まされた。

星が一斉に輝き出した。

「この火が見えはせぬか」

「見えても追撃もなるまい」

志田が答えた。

「明朝、追跡隊がきても灰の跡を見るだけさ。それよりも火を焚かぬと寒さと、もう一つうるさいのが来る」

その言葉が終わるか、終らぬうちにヤケノママから中大嶺への上り口のあたりで、突然に昨夜と同じ哀愁と殺戮を帯

びた吠え声が長々と起った。

今夜は風も死んでいた。原生林はひっそりと星屑の下で息を止めている。それだけにその呼びかけはいっそう悲しげで凄愴な美しさを持っていた。

「ほーら、云った通りだ」

志田は棒の先で偃松の枝を持ち上げた。炎の勢いが急に強くなると、もう一つ枝を加えた。

呼びかけが闇と山の冷気を貫いてもう一度長々と起って絶えると、谷を挟んで向うの崖から応答する叫びが起った。

そして次は殆ど同時ぐらいに西吾妻の嶺に続く尾根のあたりと弥兵衛平の針葉樹林の中から起った。

最初の澄んだ歌声に比べると後のはどれも幅広の、殺伐さをむき出しにした吠え声だった。

呼び交しは焚火の光の届く範囲の外で夜つびで続き、墓の下から浮かび上った亡霊たちの合唱のように、東の空が白く暖まり出すと消えていった。

「見ろ、こんなに近くまできてやがった」

志田は雪につけられた足跡を見ていまいましてにその上に唾を吐いた。

「まあいいさ。あいつらもせっかくここまでついてきて御馳走にありつけなかったわけだ。今日は里の方に降りてみよう。」

送り狼とはよく云ったものさ」

二人は昨夜も一睡もしていなかった。そのため苛ら立つ

ていた。

怪我人は昨日よりも悪くなって、ひどく苦しげに呻いていた。

「苦しかろうが我慢しろ。今日か明日中には手当をしてやるわ」

だが二人の考えは大変な錯誤であったことを間もなく知らされた。天狗岩から針葉樹と闊葉樹の入り混った林を縫って下っていった火焰滝の傍の湧湯には傷ついた薩長兵たちが大勢治療に来ていた。

この様子では米沢へは降りられない。二人は負傷者を担いで再び尾根へ引返した。この上は山づたいに栗子、稲子を越えて七ヶ宿から白石、仙台へ出るしかない。

山腹にまで敵が来ている以上、安心して火を焚くこともできない。

二人は原生林の中で夜を明かすことにした。食糧はもう全くなかった。

飢餓と疲労と不眠とで、火を起すのも億劫で、冷たい土の上に倒れた。

しかし、最初の追求の叫びが背後に起ると二人は冷水をかけられたように起き上った。

林の中は既に闇の壁が張り回らされていて注意して見るとその中を一对の螢火が幾つも動き回っていた。あるものは下から上に、あるものは上から下に、そしてあるものは水平に移動し、またあるものはじっと固定して動かない。

星とも、螢火とも、火の粉とも見えるそれらの光は、三人の人間を中心にしてぐるりと取りまいてるのだ。

「火だ。火を起せ、金子」

と志田は叫んだ。

「畜生ッ、もう我慢がならん」

吐き捨てるように云うと、志田は刀を握んで光の粒々の壁の方へ進んでいった。

「待て、志田ッ」

金子が叫んだ。狼たちは闇の中から相手に残された体力と気力——つまりそれが総合された戦力を推し計ろうとでもするようにじっと沈黙を守っていた。狼たちがはつきりと敵意を見せたのはこのときだった。狼たちはこの人間がひどく参っているのを肉食獣の本能で見てとった。

彼らは近づいてくる志田から、以前のように逃げ去ろうとはせず、牙をむき出して威嚇した。

唸り声は志田の疲れて苛ら立った神経をひどく刺戟し、前後の考えを忘れさせた。志田は一番近くにぼんやりと輪郭を見ている大きな奴に、膝をつきざまに、

「やっ！」

と抜きうちを払った。だが、それは相手の方で十分に計算に入れていたことであつた。狼の毛深い、瘦せた体は志田の刀の切尖より一尺も離れた空間に軽々と浮かんできた。狼は空中で身を捻って反転すると後肢の爪が大地をひっ搔く反動を利用して直ぐに攻撃に移った。